



TITLE:

## 実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.13

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア  
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた  
めの実践型地域研究

---

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会  
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.13. 実践  
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2009

ISSUE DATE:

2009-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147126>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の  
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No. 13 2009 年 11 月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市 保津峡

## 守山フィールドステーション

### 記憶に残る場所 ―水害に関する史跡―

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

前回、「A さんとの出会い ―在所の方から学ぶ野洲川流域調査―」（本ニュースレター11号）で、滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）で生まれ育った A さん（1925 年生 84 歳）の記憶に残る場所を写真に撮影し、記録していることを簡単に述べた。ここでは、A さんの記憶に残る場所を紹介したい。

最初、A さんに案内された場所は、野洲川流域にある水害に関する史跡であった。水害の史跡はおおよそ 3 つに分類できる。1 つ目は、防災祈願や水害からの復旧を願って建立されたり、植樹されたりしたもので、3 つのうちで一番多く見られる。神社が 2 か所、祠が 1 か所、そして神社などの植樹が 2 か所ある。ほかに、水災記念碑がある。これは、1913 年 10 月、台風によって増水した野洲川が、笠原町で決壊し、死者 32 名の被害がでたことを忘れないように、再び悲惨な水害を繰り返させないようにと願いを込めて建てられた。

2 つ目は、水害にあたり殉職したりした人々を弔った碑であり、3 つ目は、水害対策に尽力した人々をたたえた碑である。双方とも、2 つの碑があった。

これらの史跡の中で、最も A さんの記憶に残る場所は、守山市笠原町にある蛸江（つぶえ）神社である。



写真1: 蛸江神社。

「蛸」（つぶ）とは、本来、ハマグリなどの二枚貝を意味するが、笠原地区ではタニシのことを指して「つぶ」と呼ぶ。

神社にはタニシに由来する次のような伝説がある。

1721 年（享保 6 年）、豪雨で神社の近くの野洲川の南流の堤が切れ、御神体を安置している社殿が流れそうになった時、川上からたくさんのタニシが付いた神輿が流れてきた。タニシの重みで神輿が社殿の前に止まり、社殿の流失を防いだといわれる。人々はタニシを神の使いとして感謝し、タニシを食べるのを絶ち、神社の境内に池を掘って、タニシを放して大切に保護してきた。池を作ったときに蛸江神社と名付けられ、この池は「御蛸池」（おつぶいけ）と呼ばれている。笠原地区では、戦時中や戦後の食糧難の時でも栄養源であったタニシを口にできなかった。人々はタニシに敬意を払っていたからである。

だが、A さんによると、野洲川の放水路建設のための改修工事で南流が廃川になったため、御蛸池の水が枯れてしまい、神の使いであるタニシは保護できなくなったという。A さんと同神社を訪れた時、御蛸池は地下から水を汲み上げて、菖蒲が植えられていた。「前は地下から水を汲まんでもよかったんや。こうなってしもたんや」。

野洲川流域の水害の史跡は、災害が繰り返されてきた地域の人々の苦闘や防災の祈願を知る手掛かりだけでなく、野洲川改修工事後の人々の生活の変化を刻むものとして存在していることを知った。



写真2: 蛸江神社付近の野洲川旧南流の石垣の堤防。



### ヤマグワを活かす

朽木 FS 研究員 増田和也

余呉における、かつての山地利用の特徴のひとつに、桑栽培と結びついた焼畑があげられる。余呉の焼畑では、1年目にカブラ、2年目以降にはソバもしくはアズキ、そして最後に桑であった。ただし、桑についてはわざわざ苗を植えるというのではなく、ヒトリバエ（自生）してくるのだという（本ニューズレター10号参照）。焼畑のために林野を伐開することで地表に太陽光が当たるようになり、桑の生育が促されるということであろう。

桑の葉は、蚕のエサとして収穫されていた。余呉の山間部をふくめ湖北地方一帯では、明治期から1960年代まで養蚕が盛んであった。そのために桑の葉はきわめて重要で、野生種だけでは必要量をまかなえないため、畑以外にも土手や河原にも積極的に桑は植えられてきた。

地元協力者である永井邦太郎さんから話を伺ううちに、一口に桑といっても、じつは幾つもの品種があることがわかった。たとえば、シンザエモン。この名は、昔、シンザエモンという人物がこれをこの地域に持ち込んだことに由来するという。これは、田畑の端や河原に植えられている。一方、野生の桑であるのがヤマグワとギラである。ギラの名は、その葉の表面に光沢があり、陽の光をギラギラと照り返すことに由来する。かつて焼畑跡にはギラばかりが生えてくるところがあり、そのようなところはギラバタケとよばれた。ヤマグワとギラの葉を食べた蚕は、糸の検収率がよく、高値で取引された。しかし、これらの葉は薄く、籠にいっぱい詰めても荷は軽く、嵩はあっても蚕は瞬く間に食べ尽くしてしまう。そのため、永井さんは1日に数回も焼畑跡まで葉を摘みに出かけたという。

このように、食糧生産のために拓いた焼畑は、桑の自生を促し、しかも野生桑は栽培種よりも高い価値をもっていた。このために、人々は焼畑休閑後も桑の葉を摘むために焼畑跡へ何年間も通った。そして、桑の樹が大きくなり葉を摘みにくくなると、桑を倒してふたたび焼畑を拓いたという。つまり、焼

畑－桑畑－焼畑というサイクルが生み出され、余呉の焼畑はこの地の生態的条件と当時の地場産業とが上手く適合した生産システムの一例であった。もっとも、桑がよく生えるところをわざわざ選んで焼畑を拓いていたわけではないというので、このようなサイクルがみられたのは、ごく一部であったかもしれない。

現在では、焼畑も養蚕も過去のものと思われている。山は人工林となり、林業の低迷で近年は山に入る人も少ない。けれども、余呉の自然環境の特色は山であり、そこから得られる恵みであろう。そこで、ふたたびヤマグワに注目してはどうだろうか。今日では蚕のエサとしての需要はほとんどないが、桑は昔から薬用効果が知られ、一部では健康茶として販売されている。また、果実もおいしい。ならば、養蚕において栽培種よりも高い評価であったヤマグワは飲食用にもうってつけではないだろうか。何よりも、ヤマグワは森を拓けばヒトリバエしてくるのであり、この地域に根ざした資源である。もちろん、商売として成立させるには、多くの課題があるにちがいない。しかし、ヤマグワは焼畑や養蚕を伝える郷土史の教材ともなるであろうし、ヤマグワのために森を拓くことは植生を更新させ、多様な植生状況が生み出されることにより生物多様性にも寄与すると考えられる。

ヤマグワを用いて、何か新しい取り組みはできないだろうか。森の中でおぼろげな陽光を浴びてうつむく幼いヤマグワ。それを見ながら、ふと考えた。



写真：焼畑跡の脇に残る桑の木。

## 亀岡の農業と自然(3)「亀岡市の水田と鳥類」

京都学園大学 高橋藍子

亀岡の水田にはどのような鳥が訪れて、水田の状態や周辺の環境は出現に影響するのか、時間帯によって出現する種や個体数に違いはあるのか。これらのことを知りたくて、亀岡市の特徴の1つである水田地帯での鳥類調査を始めたのは、今年6月のこと。

亀岡市は農業の地として歴史が深く、京都府内最大の面積を有している。現在も一部の地域では石垣を組んだ棚田が残っている中、近年圃場整備が行われ亀岡の農環境は変化しつつある。

調査を行ったのは、亀岡市曾我部町西条と同市保津町保津新田の2か所。8月末までに各調査地で40回ずつ行った調査で記録した鳥類は計42種、9368個体(曾我部町35種4280個体、保津町36種5088個体を記録)に上った。

調査は日の出から日の入り(4:30~19:30)までを1時間半毎に区切り、曾我部町2.1km、保津町2.5kmのルートセンサスを行った。

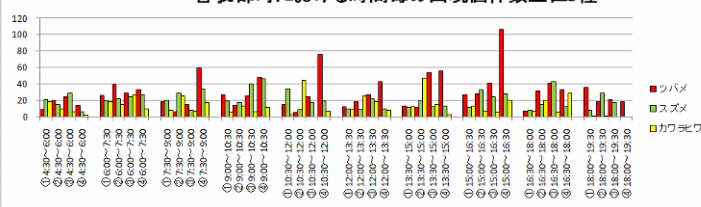
鳥類調査から見えたことは、特定の時間帯に集中して出現する傾向は見られなかったこと。一般に鳥類は早朝に頻繁に行動すると言われているが、今回の調査では最もよく見られた上位3種を見ても、日の出から日の入りまでまんべんなく観察することができた(図1)。森林での鳥類観察は、障害物が多く鳴き声が頼りとなる為、囀りがよく聞かれる早朝が観察に適していると言われるのだろうが、視界

が広い水田では、鳴き声に頼らず観察できることが今回の結果に大きく影響したのだろう。

また、環境別に鳥類の利用率をみると、農地に最も多く出現した上位3種は曾我部町と保津町で同じであったのに対し、河岸、上空、電線・電柱、その他(竹林・民家)での上位3種は調査地間で異なるものとなった。これは、曾我部町の調査地の川は幅が狭く浅瀬で、近隣に竹林があるのに対し、保津町の調査地の川は幅が広く、アオサギやスズメがねぐらにしている林が近隣にあるといった地域間の環境の違いが、同じ「水田」でありながら出現する鳥類の種類や数に差を生んだと考えられる。また、曾我部町は保津町に比べて水田1枚の面積が小さく、農道が狭いなど、水田の環境にも違いがある。鳥の生活には、河川や竹林、民家の有無だけでなく、稲作や畦の草刈りや中干しなどのような人間が水田を利用することで起きる変化も影響しているだろう。

今回の調査では、曾我部町と保津町のどちらも色々な種類の鳥が色々な場所で採食をしたり囀ったり日光浴をしている姿を見ることができた。今後の調査では、秋冬に飛来する鳥類の移り変わりと共に、調査地を増やし、環境ごとの鳥類の出現傾向をみていこうと考えている。

曾我部町における時間毎の出現個体数上位3種



保津町における時間毎の出現個体数上位3種

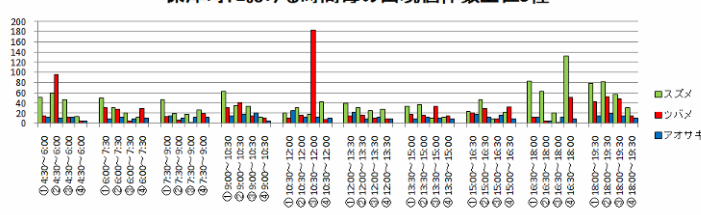


図1. 曾我部町と保津町における時間毎の出現個体数上位3種



写真1:曾我部町で撮影したホオジロ。春から夏にかけて、枝先で囀る姿がいたるところでみられた(2009年4月12日撮影)。



写真2:我部町の農道で砂浴びをするヒバリ。春は上空で囀る姿が、夏には道路脇で砂浴びする姿がよくみられた(2009年7月1日撮影)。



写真3:保津町の電線で撮影したモズ。10月から11月にかけて、高鳴きがよく聞かれる(2009年10月20日撮影)。



写真4:保津町で撮影したアオサギ。刈り取り後の水田に飛来していた(2009年10月20日撮影)。



### ■第17回 定例研究会

1. 日時：平成21年11月27日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：Dani Duri（Dirang 県保健局局长）  
発表内容：「Dirang 県の医療と健康」

発表者2：Rinchin Tsering（Brokpa の社会福祉協会会長）

発表内容：「Brokpa の人と社会福祉協会の活動」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 杉が植えられた水田にて

東南アジア研究所 安藤和雄

「日本人は木を食べたほうがよい」とダニドゥリさんが、可笑しさをこらえて、コメントしました。2009年11月29日、南丹市美山町知井地区の過疎が進んでいる知見集落の杉が育つ水田跡地でのことです。ダニドゥリさんは、インドのアルナーチャル・プラデシュ州ロアー・スパンシリ県ジロ郡のアパタニ族の出身のお医者さんです。現在、同州のウェスト・カメン県の県保健局の局長さんです。ダニドゥリさんとともに来日している同じくウェスト・カメン県デイルン郡のモンパ族の方で、地元のNGO・ドゥンカルバ社会福祉協会会長のリンチン・スリンさん、東南アジア研究所の招へい海外客員研究者のミャンマー歴史研究所研究部長のミン・ティンさん、総合地球環境学研究所研究員の小坂さん、京大医学研究科博士課程2回生の石本さんと私で、2009年11月28日に知井地区北集落の「かやぶきの里」の美山民俗資料館を訪問し、同地区中集落の民宿「まるや」で一泊しました。その翌朝のことです。コメントはユーモア好きなダニドゥリさん流のダジャレのセンスが言わせているのでしょうか。これには伏線がありました。29日の朝、「まるや」の女将さんから、近くにお父さんを第二次世界大戦のミャンマー戦線で亡くされたMさんが居られ、何度もミャンマーに出かけておられます、という話を聞き、Mさんを訪問しました。その時、Mさんが、日本の発展はアジアの国々の犠牲に負うところが大きい、という趣旨の発言があり、申し訳ない、と3名のアジアの隣人に言われたのです。この態度にダニドゥリさんがいたく感激しました。杉林となった水田を前に、私は、米を少しでも多く生産したいという願いから苦勞して作られた水田だったことと、現在の日本の食料の多くを輸入に頼りきっていることなどを説明しました。それを受けてのダニドゥリさんのコメントなのです。本当に日本人は木を食べるようになればよいね、と私も返答しま

した。インドやミャンマーでは、自国に必要な食糧は国内生産が当たり前の常識となっています。9月の始めに、旧美山町役場の元助役で、観光カリスマとして、退職後美山町の観光開発に尽力されている小馬さんと一緒にバングラデシュの友人2名を連れて知見集落を見学しました。小馬さんから、最近では杉も植えず放棄した水田が多くなりつつある、こちらの方が問題は深刻だ、とお聞きしました。一般に5年水田を放棄すると、もとの水田に戻すことは容易ではないと言います。農家が水田を放棄せざるをえない状況をつくりだしている日本の社会、アジアの開発途上国の人々から見れば、奢りとしかうつらないような日本の農業・食糧事情、それでも救いがあるのは、美山町知井地区のように、持続的な暮らしがつくりあげてきた自分たちの文化の価値を自覚し、それを土台にした農村開発の実践事例が日本のあちらこちらに実現していることです。あきらかに、これまでの都市に近づこう、都市に頼ろうとしてきた農村とは異なっています。

私は、海外、特に、アジアの開発途上国から来日した友人・知人に日本の過疎が進む農村の現状と自分たちの文化に根差した新しい農村開発の試みを見学してもらっています。

都市のもっている匿名性の自由な気分や、生活のはなばなしさ、便利さ、収入条件の良さを意識・無意識に無邪気に宣伝し、都市生活に農村生活を近づけることが「善」であった戦後から高度経済成長期の日本の農村開発の在り方が、ボクシングのボディブローのように農村の人々から在地でいきつづけることへの自信を奪っていった。やっとその呪縛から農村が解き放れつつあると実感できます。このあ



写真：記念撮影。

たりを「百聞は一見にしかず」で、アジアの開発途上国の人々に日本の現場で直観してもらいたいと願っているのです。